

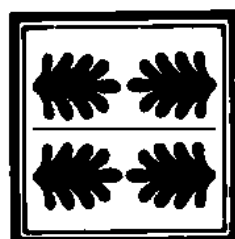
闇のなかのあなた

ミステリー傑作選10

日本推理作家協会編



年度の話題作をことごとく網羅し、その多彩豊富な内容を一望に見わたす強力な選集。日本推理作家協会が責任編集した本巻所収の13編は、わが国のミステリー小説のひとつの到達点を示す作品群である。



講談社文庫

闇のなかのあなた ミステリー傑作選10

日本推理作家協会編

昭和55年1月15日第1刷発行

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国印刷株式会社

印 刷 豊国オフセット株式会社

製 本 株式会社若林製本工場

© Nippon Suirisakka Kyokai 1980

Printed in Japan

0193-361567-2253 (0) 540円

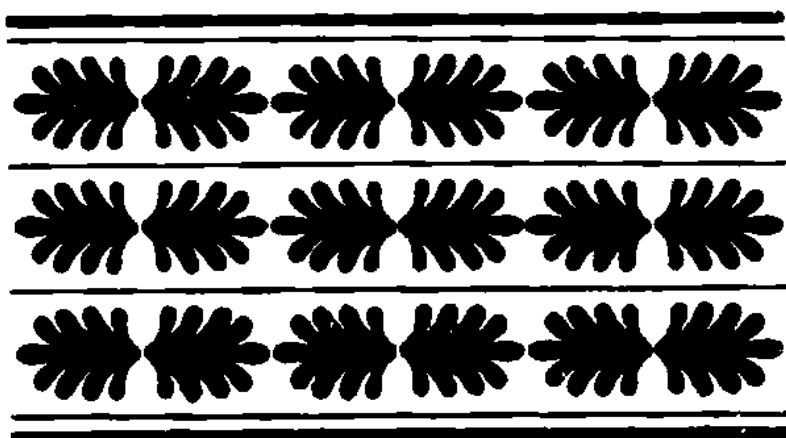
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

講談社文庫

闇のなかのあなた

ミステリー傑作選10

日本推理作家協会編



講談社

目次

幽 霊	仁王幻想	謎とき	甦った脳髓	気まぐれな死体	社長室のパンダ	如菩薩団	魔少年	砂漠と花と銃弾	誰知らぬ殺意	赤い点が光った	蠟色の顔	憎い亡霊
-----	------	-----	-------	---------	---------	------	-----	---------	--------	---------	------	------

笹沢左保	石沢英太郎	菊村 到	草野唯雄	土屋隆夫	戸板康二	筒井康隆	森村誠一	三好 徹	夏樹静子	佐野 洋	都筑道夫	山村正夫
七	五〇	九七	一九	一五六	一九〇	二二七	二四七	二八八	三三二	三三三	四三六	四五六

日本推理作家協会は、毎年、その前年に発表された会員の短編のなかから、すぐれたものを選んでこれを推理小説年鑑として刊行している。同じようなアンソロジーは、日本文芸家協会によつて、いわゆる純文学、時代小説、中間小説の各分野において編さんされているが、本協会の年鑑はすでに二十年の歴史をもち、推理小説ファンの広い支持を得てきた。

すぐれた短編推理小説とは何か——ということになると、各人各様、さまざまな議論のあるところだろうが、本協会の場合は、二十人をもつて構成される理事会で五人の編集委員を選び、この委員たちが数百にのぼる作品の全てに目を通して合議の上、収載作品を決定し、理事会の承認を得ている。現在においては、これ以上の方法はないと思われる。また、あらためていうまでもないが、一冊の本に収載できる作品には限度があり、割愛せざるをえなかった優秀作品も多いのである。編集委員はいつもそのために頭を悩ます、と聞いている。

年鑑はハードカバーの上製本によつて講談社から刊行されているが、それとは別に、買いやすい価格のハンドデイレ文庫版で、読者にお目見得することになった。これはその一九七五年版である。すぐれた作品は、時代の移り変りには関係なく読めるものである。本書によつて、推理小説のだいごみを味わつてくださるとありがたい。

一九八〇年一月

闇のなかのあなた

ミステリー傑作選
10

幽 霊

笹沢左保

著者紹介 昭和五年横浜生まれ。
昭和三十三年「闇の中の伝言」「九
人目の犠牲者」を発表し、推理小
説界にデビュー。昭和三十六年長
編「人喰い」で日本探偵作家クラ
ブ賞を受賞、推理作家としての地
位を確立した。代表作に「突然の
明日」「六本木心中」など。

1

何とも、すっきりしない気分である。真暗なところにいて、じつとりと冷や汗が滲み出て来るような圧迫感を覚える。そんな、心地なのだ。重苦しい闇の中に、閉じ込められているような不快感であった。

だからと言って、極端に苦痛だというのではない。中途半端なのだ。居ても立ってもいられないという二日酔いの苦しみには、自虐的な満足感が伴うものである。ところが、中途半端な二日酔いだとそうはいかない。

それほど苦しくはないが、すべてを放棄したくなるように気が重い。何をするのにも心が虚ろ

であり、不快感がどこかでニヤニヤしているように思えてならない。蛇へびの生殺しというやつなのである。

死んでも死にきれない、という言葉がある。あるいはそれに、当て嵌はまるのかもしれない。俺は死んでいる。そのことに、間違いはないのだ。俺の肉体はすでに火葬に付されて、この世というところには存在していない。もう初七日も、すぎている。

だから、俺は確かに死んでいるのだ。生命を絶たれ、肉体も消滅している。しかし、それでいて完全には、死んでいないような気がする。俺の魂は依然として、この世と称されているところに留とどまっているのである。

古風な言葉を用いれば、成仏できないのだ。魂が、宙に迷っている。死んだくせに、死にきれずにいる。この中途半端な不快感と重苦しい気分は、恐らくそのせいなのに違いない。死んでも死にきれないというのでは、それが当然だと思われる。

なぜ、そんなことになったのか。その理由は、簡単である。みずからの死に、納得がいかなからなのだ。死者はすべて、みずからの死について納得している。どんな経緯があつて、なぜ死んだのかわかっているからであつた。

最も単純にその点を理解できるのは、病死した者だろう。病気で死ぬのは人間の宿命であり、そのことに対しては納得するもしないもない。事前に覚悟もできているから、それが寿命とされれば大往生も遂げることが可能なのだ。

自殺者も、そうである。自分の意志によって死を選ぶのだから、そこには矛盾も疑問もないわけだった。自殺へ追いやられた原因に不満を持ったとしても、死そのものはみずから決めたこと

なので納得できないはずがないのだ。

事故死となると死者にとっては多少不本意だが、やはり事実として否定はできないことなのである。道を歩いていて自動車にはねられた、建築現場にいて落ちて来た鉄板に押し潰された、というふうに関係がはっきりしていれば、みずからの死について納得するわけであった。

殺された場合は、どうだろうか。殺された者が加害者に対して恨みを抱き、成仏できずに幽霊となつて出現するという話は昔からある。だが、これはあまり確かな話とは言えない。殺人は悪いことだという教訓を含めて、生きている人間が作った怪談である。

死者は、寛大である。殺されたからと言って、生きている人間に報復したりはしない。それは、もっと生きていたい、死にたくはないと思っているこの世の人間の気持から、生まれたお話なのだ。この世の人間には、あの世の様子がわかっていない。

この世よりあの世のほうが、はるかに素晴らしい住みよかったとしたら、どうだろうか。その素晴らしい別世界へ送り込まれた者は、むしろそうしてくれた加害者に感謝するはずである。それを恨んで、この世の人間に報復するなど、まさにナンセンスではないか。

だから、誰に殺されたのかということが明確である限り、死者は納得もするし成仏できるのである。殺されたということ自体には、それほど問題がないのだ。他殺も自殺も事故死も病死も、この世を去るという点でまったく変わらないからであった。

だが、例外もある。俺のように死者が、みずからの死に納得がいかない場合だった。たとえば非常に健康だったのに急死して、医師から死因不明の断を下された者などがそうである。

穏やかに晴れた日、何ともない野原を歩いていて、いきなり外傷を負い死亡した者も、その範

罫にはいるだろう。次に殺された人間だが、動機も犯人も不明という場合がそうであった。理由もなく、相手が誰かもわからずに突然、殺されてしまう。これでは自分の死に納得がいかないのも、当然ということになるだろう。

俺が丁度、それに該当するのだ。俺が死んだということは、素直に認めざるを得ない。では、どうして死んだのか。病死ではないのである。事故死でもないし、もちろん自殺でもない。残るは、他殺のみなのだ。俺は殺されたのに、間違いないのである。

だが、誰に殺されたのかは、見当のつけようもない。また殺された理由、動機についても、まるで思い当たらないのだ。従って、俺は自分の死を納得できずにいる。そのために死んでも死にきれないという状態にあつて、俺は中途半端な不快感に苦しめられているわけなのである。

俺の俗名は九鬼昌彦、死亡したのは十日前の一月八日午後十一時三分だった。行年、三十歳である。死因は墜落死で、頭蓋骨陥没と全身打撲であつた。独身社員アパートの六階のベランダから落ちて、即死したのだ。

俺はその夜、十一時少し前に社員アパートへ帰つて来た。俺は、酔っていた。六階の部屋にはいった俺は、その足でベランダへ出た。ベランダといつても形だけのもので、廊下ほどの幅しかなかった。

高さ九十センチの鉄柵がついている。俺の腰ぐらいまでしかないし、その高さは決して絶対安全とは言えなかった。しかし、鉄柵の高い低いについては、まったく問題がなかったのである。

そんな形だけのベランダへ出る者はいなかったし、生活の場としてまるで無用な付属物にすぎなかったのだ。それに独身社員アパートなので、子どもがいるはずもない。つまり鉄柵の高低と

危険性に、因果関係はあり得なかったのである。

その証拠に独身アパートができて五年にもなるが、事故はもちろんのことベランダの鉄柵の高さに関して一件の苦情も出ていなかった。俺もそのとき鉄柵の高さなど念頭にも置かずに、ベランダへ出て行ったのだ。

目的はあくまで、冷たい風に当たることであつた。俺はかなり、酔っていたらしい。この日、四時半に会社を出た俺は、赤坂にあるホテルへ向かった。そのホテルの『孔雀の間』で、社長の主催による年頭所感パーティーなるものが開かれていたからである。

これは恒例のパーティーであり、いわば新年宴会だつた。毎年順番に百人ずつの社員を社長名で招待して、一流ホテルの豪華な宴会場でカクテル・パーティーが行われるのだ。その席で必ず社長が年頭所感を述べるので、年頭所感パーティーなどと称されていたのである。

パーティーは八時に終わり、俺は宣伝企画課の連中十人と二次会へ繰り出した。二次会が新橋、三次会が新宿であつた。三次会のときには、もう六人に減っていた。四次会が高円寺で、三人でやった。

正直なところ、俺は二次会あたりで切り上げるべきだつたのだ。去年の夏までは酒豪で鳴らした俺であつたが、いまはもうとてもそんなコンディションではなかったのである。去年の九月に俺は、新橋の大学病院に入院していたのだつた。

胃潰瘍であつた。十月にはいつて手術をすませて、十一月に退院した。十二月いっぱいには自宅療養ということになり、俺は独身アパートを出て埼玉県の浦和にある親の家へ住み移った。

浦和の家には、母親と弟妹たちがいる。父親はとくに、故人になっているのだ。そこで正月

を過したあと、おれは一月五日に再び都下の三鷹市にある独身アパートへ戻った。新年から四月ぶりに、正常勤務ということになったからである。

本来なら、そんな状態にあつて酒を飲むほうが、どうかしているのだ。しばらくは、摂生しなければならぬ。そんなことは常識だし、俺だって百も承知していたのであつた。だが、生来の酒好きというものは、何かと理由をつけては飲みたがる。

「アルコールは、厳禁ですか」

退院するとき、俺は主治医にそう訊いてみた。もちろんだと言われるのを、覚悟の上での質問であつた。ところが案に相違して、嬉しい返事を得ることができたのである。

「言葉だけで禁ずるのは簡単ですが、実行はとても望めないだろうね」

主治医は、そう言ったのだった。

「すると……？」

「まあ、少しならいいでしょう。胃潰瘍もそれほど、重症だったわけではないし……」

「嗜む程度なら、構いませんか」

「好きなものを禁じていて、交通事故にでも遭つて死んじまったら意味がない。ぼく自身がそういう考え方なので、アルコールさえ控えていれば長生きができるとは言いきれないしね」

主治医は言つた。俺はその言葉に勇を得て、無茶飲みしなければ身体に影響はないという自信を持ったのである。それで俺は、正月から酒を飲み始めた。少量だったせいか、母親も特に制止しようとはしなかった。

そんなこともあつて俺は、年頭所感パーティーに臆することなく出席した。酔いが回ると、も

う怖いもの知らずであった。俺は調子に乗って、二次会にも参加した。

「大丈夫なのかい、九鬼君」

「九鬼さん、無理しないほうがいいですよ」

「かつての酒豪も、いまは病氣上がりなんだからねえ」

同僚たちからそんなふうに言われると、俺は一層奮い立った。反撥と意地が、俺を煽るのだった。そのために三次会にも、顔を出すという結果になったのだ。しかし、さすがにそこまでが、限度だったらしい。

四次会には加わっただけで、十五分も同席していなかった。俺は気分が悪くなったので醜態を晒す前にはと思い、二人の同僚に別れを告げて高円寺の小料理屋を出たのであった。そのあと高円寺から中央線に乗り、三鷹駅で下車した。

三鷹駅前で、タクシーに乗り込んだ。独身社員アパートは、中原三丁目というところにある。三鷹市の、南のはずれに近い。すぐ西側に、消防大学と消防本部研究所があった。東西薬品東京本社の独身アパートは、上下に細長い建物だった。

あまり広くない敷地に、六階建てのビルが突っ立っているのだ。この独身社員アパートには、百四十人が収容できることになっている。六畳の洋間にトイレがついていて、二段ベッドの設備がある。一部屋に、定員二名だった。

しかし、いまは七十人ほどの独身男子が、このアパートで寝起きしているのにすぎない。五反田にある会社へ通勤するのには、やや不便だということもあった。だが、何よりも大きな原因は、管理部門に勤務する独身の男子社員が少なくなったということなのである。それで、この三

鷹の独身社員アパートは改築して、一、二年のうちに家族持ちの社員住宅に変わる事になったのだ。

定員の半分しかないのに、各室ともひとりで使用することを許されている。俺も六階の八号室を、ひとりで占有していた。エレベーターがないので、六階まで階段を上がった。夜の十一時ともなると、起きている者はいなかった。

裏口からはいれば、誰にも見咎められない。階段にも廊下にも、人の気配はなかった。俺は八号室のドアをあけた。ドアに鍵をかけるのは就寝前、という習慣がついている。すぐに寝るつもりはなかったのに、俺はドアをしめただけで鍵はかけなかった。

俺は室内を素通りして、ベランダへ出た。吐き気はおさまっていたが、あまりいい気分ではなかった。それで俺は、冷たい夜気に当たろうと思ったのである。俺はベランダに立って、両手を鉄柵の上に置いた。

風はなかったが、夜気が肌を刺すように冷たかった。飲みすぎたときには、何よりの薬である。俺は深呼吸を繰り返して、白い湯気のような息とともに体内の毒素が吐き出されるといった錯覚を、楽しんでいたのだった。満天の星空であった。

同じ東京でも、ここでは星が見える。いかにも、冬の空らしい。凍てつくような夜空という言葉、俺は久しぶりに思い出していた。ここに住んで星空を振り仰ぐというのも、初めてのことであった。

都心のように、華やかな電飾は見られない。しかし、広大な黒い空間に無数の明かりが、ダイヤモンドを散りばめたように点在している。調布市、そして世田谷区だろうか。そこには落着い

た生活が感じられて、安らかで静かな寝息が聞えて来そうな気がした。

素晴らしい夜景だと、俺は思った。柄にもなく感傷的な気分にあぐらをかいていたのも、多分そのせいだったのだ。俺は十分間も、そのままの姿勢でいただろうか。俺はいわば、考える人になりきっていたのである。

不意に俺は、激しい衝撃を背中に受けた。体当たりするような強い力で、俺は突き飛ばされたのだ。俺の上半体は苦もなく鉄柵を越えて、頭から吸い込まれるように地上へ落下したのである。

2

ここで一つ、断わっておかなければならない。現世の人々は、大変な誤解をしているということなのだ。恐らく神さま仏さまはお見通しだといった言葉から、その誤解は生じたのに違いない。

現世の人々は死者つまり靈魂が、あたかも超能力を具そなえているかのように考えがちである。あの世から見れば、この世のことはすべて明らかだ。死んだ者は、何もかも承知している。そのように思っているらしいが、それはまったくの誤解である。

わからないものは、死者にもわからないのだ。俺はいきなり突き落されたのであって、それが誰の仕業しぎか確かめる暇もなかった。しかし、死者つまり靈魂になったからには、犯人が誰であつたかぐらいいは見通せるだろう。と、そう言われそうな気がするが、それがとんでもない誤解なのである。

死んだからと言って、急にスーパーマンになれるわけがない。超能力には、無縁であつた。俺